

父も母もアニメを見ることなどない。わたしがアニメを見ていると「そんなものばっかり見て！」と口うるさい。だからわたしには、そのときの父と母の姿が、痛烈な印象となっていた。どんな話をしていたのか、はっきりとは覚えていない。しかし「このシーンには感動したよね」「うん、泣いた」「僕も……」の会話だけは、記憶にある。ラストの、ネロとパトラッシュが天に召されるシーンを話していたのだろう。その言葉を信じ、この夏の読書感想文は『フランダーズの犬』と決めた。父と母がそんなに感動した『フランダーズの犬』って、どんな物語なんだろう。本を手にする前から胸が高まった。だが、その期待は見事に裏切られた。『フランダーズの犬』を読んだことを、大失敗したと思った。こんな救いようのない話のどこ

に感動するのだろうか、わたしの偽らざる思
いだった。
「ネロはどうして幸せになれなかったの？」
そのやるせない気持ちを母にぶつけてみた。
母は少し困惑した表情を見せたが、
「ネロは本当は幸せだったのよ。純粹な気持
ちを持ったまま天に召されたんだから。そう
思わない？」
「それってどういふこと？」
「もしネロが画家として成功していたとした
らどう思う？」
「お金持ちになって、アロアと結婚して、め
でたしめでたし、幸せになったんじゃないか
なと思うよ」
「それって本当に幸せ？」
「貧乏よりはるかに幸せじゃない」
「画家として成功するってことは、どうい
うことなのか分かる？」
「分かるって？」
「鑑定番組に出るような海千山千の画商たち

「本当にそう思う？」
 「ええ、失意のうちに死んだ、それが結末だ
 ったら、『フランダーズの犬』がこんなに多
 くの人たちに感動は与えないわ。絶望のうち
 に死んだなんてラストの小説に涙を流したり、
 感動したりする人っていると思う？」
 「うん、いないよね」
 「そう思ったらもう一度読み直してみたら？
 きつと『フランダーズの犬』ってすばらしい
 物語だって気づくはずだから」
 そう言うと、夕ご飯の支度をするために、台
 所へと足早に立ち去った。
 母が夕食の準備をしている間もう一度、
 『フランダーズの犬』を読み返してみた。夢
 も希望もない、絶望感しか抱かせなかつたこ
 の物語が突然輝きを見せた。ネロの不幸な境
 遇も、神様が与えた純粋な心のままいられる
 かどうかの試練ではないかと思えた。
 そして、『フランダーズの犬』に素直に感
 動している自分がいたことに気がついた。